

# 文字情報による擬音語・ 擬態語と動きの想起

坪倉紀代子・柴 真理子

〈はじめに〉

筆者らは、擬音語・擬態語（以下、擬態語と記す）と、そのイメージ、及び動きとの関係に原則を見い出すことを目的に、擬態語に関する研究を継続している。擬態語は、それが初めて接する語であっても、直感的にその状況や動きをまるごと把握することを可能にする。種々の表現分野において、その表現効果を高めるために擬態語が多用されているが、殊に、イメージと動きが直結した擬態語は、ダンスの指導においても有効な道具となる。例えば「ふわふわ」、「ふんわり」「ふわっふわっ」という同じ系の擬態語であっても、それぞれ想起される動きとイメージには微妙な違いがあるであろう。また、実際の発話の仕方、即ち、リズムやテンポ、アクセント、メロディーなどの違いによって、出てくる動きやイメージも異なるであろう。このようにここでは、①どのような擬態語を研究材料とするのか、②情報の形態をどのようにするのか、という2つの問題がある。そこで本研究では、第1段階として、天沼寧の擬態語の型の分類から、XY型、XY<sub>n</sub>(r)型、XY-n(r)型と、その変形XY~n(r)型の4つの型を、また系として「ボタ」「パリ」「フラ」「クル」「ズル」「ドタ」の6語(XYに入る)を選択し、合計24の擬態語を文字情報で与え、文字という視覚認識システムを介して、どのような動きとイメージが想起されるかをみ、4つの型と6つの系における擬態語とイメージおよび動きの関係の特徴を明らかにし、そこからそれらの関係に関する原則を見い出そうとした。

〈研究方法〉

本調査では、被験者の大学生31名(m-17名, f-14名)に、24の擬態語を文字情報として与え、各語に対して①動きの型(松本の動きのcheck list ①)をSD法で回答②連想される動きを選択③連想されるイメージを自由記述という3つの回答を求めた。その結果の評定値を統計処理し、また自由記述をKJ法により分析した。なお、本調査は、1997年7月2日に実施した。

表1. 動きの型の得点《ボタ系》

動きの型	1. スピードのある 7. ゆっくりした	1. アクセントのある 7. なめらかな	1. 不規則な 7. 規則的な	1. 直線的な 7. 曲線的な	1. 拡大的な 7. 縮小的な	1. バランス 7. アンバランス	1. 強い 7. 弱い	1. 重い 7. 軽い	1. 急変的 7. 持続的
ボタ	4.433	3.567	5.567	2.267	4.633	2.833	5.6	5.67	5.767
ボタリ	6.032	4.452	5.194	2.645	4.226	3.419	5.32	4.68	6
ポターリ	5.774	5.419	4.613	3.387	3.903	3.581	4.9	4.84	4.935
ポタ〜リ	6.516	5.29	4.032	4.194	4.387	4.129	5.68	4.84	5.613
差	2.803	1.852	1.535	1.927	0.73	1.296	0.77	0.99	1.065

注：差とは、各行のMaxとMinの差を表す

〈結果と考察〉

1. 擬音語・擬態語の動きの型について

(1) 擬音語・擬態語間の相関

系を同じくする擬態語間には100%相関があるのに対し、型を同じくする擬態語間に相関が認められたのは27%~40%にとどまり、今回対象とした24の擬態語は、同じ型よりも同じ系にある語に類似した動きの型が存在すると考えられる。

(2) 擬態語の動きの型の特徴

各系ごとに、各擬態語が得た動きの型の平均値を求めた(表1. 紙面の都合上、ボタ系のみ掲載する)。ここでは3点以下と5点以上の得点をその項目に対する有効得点として、有効得点を得た項目をその擬態語に明確な動きの型とみなすことにする。各系の擬態語に明確な動きの型をみると、《ボタ系》では、〈ゆっくりした〉〈持続的な〉動きの型が明確で、また長音を含むポターリとポタ〜リでは〈なめらかな〉型も明確である。《フラ系》では、〈ゆっくりした〉〈なめらかな〉〈曲線的な〉〈アンバランスな〉〈弱い〉〈軽い〉の6つの動きの型が、《パリ系》では、〈アクセントのある〉〈軽い〉の2つの動きの型が、《クル系》では、〈曲線的な〉〈規則的な〉〈軽い〉の3つの動きの型が明確で、また長音を含まないクルとクルンでは〈スピードのある〉型も明確である。《ズル系》では、〈ゆっくりした〉〈重い〉の2つの動きの型が、《ドタ系》では、〈アクセントのある〉〈強い〉〈重い〉の3つの動きの型が明確である。

2. 擬音語・擬態語から連想される動きとイメージについて

例えば、《ボタ系》では、「はじく」「波動」という動きと「雨」「しずく」などの液体やその液体が落下する様子に関するイメージが4つの擬態語に共有されるというように、系を同じくする擬態語間では、その動きとイメージに共通性がみられるのに対し、型を同じくする擬態語間ではそのような共通性はみられない。

〈総括〉

1. 同じ系の擬態語にはその動きの型、動き、イメージに共通性がある。
2. 長音を含む擬態語と含まない擬態語で、その動きの型、動き、イメージが異なる傾向が強い。
3. XY~n(r)型は、どのような擬態語であっても「ゆっくりした」動きの型を持つ。